

看護職の定年退職に対する思いと 老後の生活への準備の有無との関連

Relationship between Nurses' Views on Mandatory Retirement and Nurse's Poorly Prepared or Prepared Post-Retirement Life Plan

豊嶋三枝子 小口多美子
Mieko Toyoshima Tamiko Oguchi

獨協医科大学看護学部
Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨 本研究の目的は、看護職の定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連を明らかにし、看護職に対する「退職準備プログラム」を考案するための基礎的資料とすることである。50歳以上の看護職者652名に対し、郵送による質問紙調査を行い、414名（回収率63.5%）から回答を得た。そのうち有効回答数は409名（98.8%）であった。看護職の定年退職に対する思いは、因子分析の結果6因子が抽出された。また老後の準備はしている者が148名（36.2%）、していない者が261名（63.8%）であった。老後の準備をしている群としていない群の2群に区分し、定年退職に対する思いの6因子それぞれについて有意差を求めた結果、老後の準備をしている者は、因子I（歓迎）において有意（ $p<0.05$ ）に高く、定年退職を肯定的に受け止めていた。反対に、老後の準備をしていない者は、因子III（逃避）（ $p<0.01$ ）、因子IV（あきらめ）（ $p<0.05$ ）において有意に高く、定年退職を否定的に受けとめていることが明らかになった。老後の準備をしていない者の定年退職に対する否定的な受け止め方は、定年退職が心理的危機となり、定年退職後の生活を有意義に送ることができなくなる可能性があると思われる。以上のことから、定年退職後の生活が有意義なものとなるように、看護職が老後の生活設計を立案でき、老後の生活の不安が軽減できるための支援のひとつである退職準備教育プログラムの必要性が示唆された。

キーワード：看護職 定年退職 思い 老後の生活への準備

Key words : Nurses, Mandatory Retirement, Nurses' Views, Post-Retirement Life Plan

I. はじめに

我が国における高齢化は、急速な進展を遂げ、人々は現役を引退した後の長い老後を過ごすことが余儀なくされている。そのために国は、高齢者が老後の生活に適応し、健康で生きがいを持って過ごすことができるための支援として、

生涯学習の推進等の生きがい政策を推進し、効果をあげてきた。しかしながら、今日においては、社会保険システムの破綻や国民医療費の増大等の社会的問題によって、年金受給の時期や受給額も一昔前とは違って非常に厳しいものとなっている。その結果、長い間職業生活に従事

した人々でさえ、老後の経済的基盤を年金に頼ることが困難な状況に陥り、経済生活や健康生活を含めた老後の生活への不安を抱えている。

このような情勢のもと、超高齢化社会において、生き生きとした老後を過ごすためには、その前段階である成人期において、自立的生活設計がなされていたかどうか大きく依存する¹⁾ともいわれるように、国民一人一人が老後の生活にスムーズに適応し、豊かな老後を過ごすために、老後の生活の過ごし方や経済的基盤などについて、早期から具体的に設計していくことが必要になってくると考えられる。それは看護職者にとっても例外ではないと思われる。

個人が老後の生活設計を立案するためには何らかの支援が必要になってくると考えられる。老後の経済的基盤や生甲斐は何によるのか等、個人が職業生活現役時代に考えることはもちろんであるが、雇用者側や管理者側が何らかの組織だった支援を行うことが望ましいのではないかとと思われる。

我々は、以上のような背景をふまえ、看護職各自が定年退職前に、老後の生活設計を具体的に考案できるように管理者側は、看護職対象の院内教育の中に「退職準備教育プログラム」を設定していく必要があるのではないかと考えた。

この退職準備教育については、すでに大企業においては、「退職準備教育」や「生涯生活設計セミナー」等の名称で行われており、定年退職後の不安の軽減や、老後の生活設計立案を目的として取り組まれている。しかしながら、医療施設内における看護職を対象とした院内教育は、新人教育やキャリアアップ教育を中心としているのが現状である。また、本研究課題に関する研究は、中国の看護職を対象とした調査²⁾³⁾、及び日本の看護職に対する調査⁴⁾と、わずかであった。これらのことから考えると、医療施設内における看護職を対象とした退職準備教育は、ほとんど行われていないことが考えられた。

そこで我々は平成17年来、看護職に対する退職準備プログラム考案のために必要なデータ収集を目的とし、看護職に対し、定年退職に対する思いや老後の生活への準備の有無および、老

後の過ごし方に等についての基礎的調査を行ってきた⁵⁾⁶⁾。その結果、看護職は定年退職に対し、肯定的な受け止め方をしている者が多いが、老後の生活については具体的な準備をしていない者が多かったという結果を得ている。けれども、定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連については明らかにすることはできなかった。そこでその関連を見るための一歩として平成18年には、平成17年の研究結果⁷⁾を基に「看護職の定年退職に対する思いを示す質問紙」を作成し、調査を行い、回答の因子分析から6因子を抽出し、その信頼性・妥当性を検討した結果を発表した⁸⁾。

本研究では同調査結果から、看護職の定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連について明らかにし、看護職に対する「退職準備教育プログラム」を考案するための基礎的資料とすることを目的とする。

II. 用語の定義

1. 定年退職に対する思い：将来訪れる自己の定年退職をどのようにとらえているかという思いや感情
2. 退職準備教育：定年退職時に生じる緊張・不安を緩和し、退職後の人生に積極的に適応していくように組み込まれた教育プログラム⁹⁾

III. 研究方法

1. 調査対象

関東圏を中心とした400床以上の医療施設で働く50歳以上の看護職者652名

2. 調査期間

平成18年1月～2月

3. 調査方法

郵送による自記式質問紙調査を行った。関東圏を中心とした400床以上の医療施設を無作為に抽出し、各施設の看護部長宛てに依頼文と調査票を一括郵送し、回収後返送してもらった。看護部長に調査への協力と配布・回収についてお願いし、調査への協力は、各自の任意であること、および、期日までに回収できた枚数のみでよいこと等を依頼文に明記し、回収において

強制力がかからないように配慮した。

4. 質問紙の内容

自作の質問紙を用いた。質問紙の内容は、①属性（年齢、性別、職種、所属施設の設置主体）②老後の生活への準備の有無、③定年退職に対する思いである。③の定年退職に対する思いの質問項目は、我々の先行研究での、看護職の定年退職に対する思いについて文章完成法で求めた回答を質的に分析し、カテゴリー化した結果¹⁰⁾を基に作成した。質問項目の妥当性をみるためにプレテストを行い、その結果を基に、研究者間で質問項目の表現や偏りなどについて協議を重ね、検討を行い修正した。最終的に22の質問項目からなり、「そう思う（5点）」～「思わない（1点）」の5段階評価とした。

5. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、対象者への依頼文に研究目的、得られた回答は研究以外の目的で使用することはないこと、プライバシーの保護と回答はコード化して処理すること、調査への協力は自由であること等について明記し、回答をもって同意が得られたものとした。

6. 分析方法

定年退職に対する思いについては回答の因子

分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、因子の抽出を行った。定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連については、老後の準備をしている群としていない群の2群に区分し、定年退職に対する思いの6因子それぞれについてMann-WhitneyのU検定によって有意差を求めた。

分析にあたっては、統計ソフトSPSS11.0 for Windowsを使用した。

IV. 結果

24施設の看護職414名（回収率63.5%）、から回答を得た。そのうち有効回答数は409名（98.8%）であった。

1. 対象者の背景（表1）

平均年齢は54.4±3.16歳。男性14名（3.4%）、女性395名（96.6%）であった。職種は、助産師23名（5.6%）、保健師0名（0.0%）、看護師315名（77.0%）、准看護師71名（17.4%）であった。

2. 定年退職に対する思いについて（表2）

定年退職に対する思いを示す質問の回答の因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。一回目の因子分析の結果、2因子にまたがり0.5以上の負荷を示す1項目と因子負荷量が

表1 対象者の背景

n=409

年 齢		54.4±3.16歳			
性 別	男性	14名（3.4%）			
	女性	395名（96.6%）			
職 種			人数	%	
	助産師		23	5.6	
	保健師		0	0.0	
	看護師		315	77.0	
	准看護師		71	17.4	
施設の設置主体	施設分類		施設数	人数	%
	国立病院機構	2	34	8.3	
	公立	6	108	26.4	
	私立大学病院	3	36	8.8	
	医療法人	2	37	9.1	
	赤十字	4	61	14.9	
	財団法人	3	56	13.7	
	厚生連	1	20	4.9	
	その他	3	57	13.9	
	合計		24	409	100

表2 「定年退職に対する思い」の 因子分析結果

n=409

質問 番号	項 目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	因子 VI
		歓迎	困惑	逃避	あきらめ	葛藤	健康・ 経済的不安
3	期待をしている	0.842	-0.122	-0.087	-0.072	0.039	-0.120
2	楽しみである	0.816	-0.198	-0.141	-0.098	0.025	-0.119
1	第二の人生だ	0.710	0.102	-0.168	-0.151	0.166	-0.147
5	自由な時間をもてる時だ	0.694	-0.211	0.116	0.044	-0.246	0.032
4	重荷をおろして自由になる	0.684	-0.190	0.072	-0.063	-0.220	0.157
7	人生の区切りである	0.581	0.146	-0.156	0.276	0.026	-0.044
9	つらい出来事だ	-0.154	0.819	0.182	0.081	0.058	0.060
10	さびしいことだ	-0.141	0.748	0.159	0.281	0.062	0.069
14	何をしてもよいかわからず不	-0.154	0.625	0.320	0.077	0.060	0.276
8	それまでの生き方が問われ	0.402	0.468	-0.184	0.152	0.096	0.058
22	関心がない	-0.062	0.061	0.844	0.072	-0.039	0.019
21	先のことである	-0.051	0.224	0.768	0.111	0.142	-0.141
20	考えたくない	-0.174	0.413	0.634	0.051	0.072	0.164
12	世の中のきまりである	-0.010	0.096	0.044	0.853	0.028	0.059
11	ある程度仕方がないことで	-0.224	0.262	0.111	0.765	-0.021	-0.069
13	頑張っ働くための目標で	0.278	0.077	-0.043	0.526	0.330	0.237
17	まだまだ働ける年齢だ	-0.052	-0.028	0.058	0.064	0.860	-0.030
18	まだまだ働きたい	-0.115	0.190	0.072	0.051	0.845	0.054
15	健康面で不安がある	0.072	0.213	0.045	0.108	-0.100	0.806
16	経済的な不安がある	-0.239	0.057	-0.076	0.035	0.130	0.795
寄与率 (%)		18.17	11.98	10.15	9.28	8.88	7.79
累積寄与率 (%)		18.17	30.15	40.30	49.58	58.46	66.25
信頼性係数 (Cronbach' α)		0.837	0.683	0.735	0.640	0.741	0.600

主因子法 バリマックス回転

低い1項目の計2項目を除いた20項目で再度因子分析を行った。その結果、6因子が抽出された。

因子Iは6項目から構成された。楽しみ、期待、第二の人生等、定年退職を歓迎している項目であったので「歓迎」、因子IIは4項目から構成され、つらい、さびしい等、定年退職に対してとまどいがみられ「困惑」と命名した。因子IIIは3項目から成り、先のこと、考えたくないという逃避傾向があることから「逃避」と命名した。因子IVは5項目から構成され、しかたがない、きまりだからということから「あきらめ」、因子Vは2項目から成り、まだまだ働きたい、まだまだ働けるといふ葛藤があることから「葛藤」、因子VIは2項目から成り、健康面・経済的不安の項目であったことより「健康・経済的不

安」と命名した。

6因子の累積寄与率は66.25%であり、因子I（歓迎）の寄与率が18.17%と高かった。各因子の信頼性係数は、因子Iは0.837、因子IIは0.683、因子IIIが0.735、因子IV0.640、因子V0.741、因子VIが0.600と、0.600～0.837の範囲であり、信頼性・妥当性が確保された。

3. 定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連（表3）

老後の生活への準備をしている群は、対象者409名中148名（36.2%）、していない群は261名（63.8%）であった。

定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連をみるために、老後の生活への準備をしている群としていない群の2群に区分し、定年退職に対する思いの6因子それぞれに

表3 定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連

n=409

定年退職に対する思い	因子	因子名	老後の生活への準備	
			している (148名)	していない (261名)
			平均ランク	
I	歓迎	* 229.87	190.90	
II	困惑	189.97	213.52	
III	逃避	165.96	* * 227.14	
IV	あきらめ	189.18	* 213.97	
V	葛藤	193.14	211.73	
VI	健康・経済的不安	190.52	213.21	

Mann-WhitneyのU検定 * * p<0.01 * p<0.05

ついてMann-WhitneyのU検定を行い、有意差を求めた。

その結果、老後の生活への準備をしている群は、していない群に比べて因子I（歓迎）において有意（ $p<0.05$ ）に高かった。老後の準備をしていない群はしている群に比べて、因子III（逃避）（ $p<0.01$ ）、因子IV（あきらめ）（ $p<0.05$ ）について有意差が認められた。因子II（困惑）、因子V（葛藤）、因子VI（健康・経済的不安）については有意差が認められなかった。

V. 考察

50歳以上の看護職409名中、老後の生活への準備をしている者の割合が36.2%と低く、定年退職を近い将来迎える予定の看護職は老後の生活への準備をあまりしていないという結果が得られた。我々が平成17年に行った研究¹¹⁾でも、517名中、老後の生活への準備をしている者の割合が29.2%という結果であった。その研究では対象者の平均年齢が47.8歳と低かったこともあり、単純に比較検討はできにくい。看護職は老後の生活への準備を十分に行っているとは言いがたい傾向にあることが示唆された。しかし、老後の準備をしていない理由については今回調査していないので不明であるため、今後新たな調査を行い結果の信頼性を追及していくことが必要であると思われる。

定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連については、老後の生活への準備

をしている者は因子I（歓迎）において有意に高かったことから、定年退職を歓迎し、肯定的に受け止めている傾向にあった。このことから老後の生活への準備をしている者は、定年退職を前向きにとらえ、歓迎し、楽しみにしている姿勢においては、老後の生活への適応がスムーズになることが予測される。

反対に老後の準備をしていない者は、因子III（逃避）、因子IV（あきらめ）において有意に高かったことから、定年退職に対して逃避、あきらめといった否定的な受け止め方をしている傾向にあった。老年期への移行期における職業領域での主要な問題は定年退職であり、定年退職による環境変化には多くの喪失感を伴う¹²⁾といわれる。また、定年退職を否定的に受け止め、不安や葛藤が大きい人にとって定年退職は、心理的危機ともなり、その後の人生を有意義に過ごすことができなくなりうるともいわれている¹³⁾。

以上のことより本調査において、老後の生活への準備をしていない者の定年退職に対する否定的受け止め方は、定年退職後の生活へのスムーズな適応が困難となる可能性があることが考えられる。その予防のためにも、定年退職前に各自が老後の生活を具体的に設計することができ、老後の生活への不安が軽減できるような支援の必要性が示唆された。

また、6因子のうち、因子II（困惑）、因子V（葛藤）、因子VIの「健康・経済的不安」については有意差がみられなかった。このことから、

老後の生活への準備をしている者もしていない者も、それぞれ多少なりとも定年退職後に対して困惑やとまどい、不安を抱えていることが考えられる。

牧野¹⁴⁾は、企業の退職者に対し、退職準備教育が退職後の人生にどのように役立っているかという調査を行い、老後の具体的生活設計立案や、健康管理、老後の不安の解消において効果的であったという結果を得ている。また、関口¹⁵⁾の大企業の従業員に対する調査でも、退職準備教育はその後の生活に役立っていると答えた者が87.4%であったという結果を得ていることから、退職準備教育が、定年退職後の生活を行う上で有意義であることを示唆している。これらのことから、看護職各自が老後の生活を具体的にイメージでき、具体的な生活設計が可能となるような退職準備教育の必要性があると考えられる。

なお、本調査においては、量的・統計的分析によって、看護職の定年退職に対する思いと老後の生活への準備の有無との関連を明らかにしたものであり、定年退職に対する思いの影響要因については明らかにすることはできていない。今後はこの点について検討していく予定である。

VI. 結論

調査対象者である50歳以上の看護職409名中、老後の準備をしている者は、定年退職に対して歓迎し、肯定的に受け止め、老後の準備をしていない者は、定年退職に対し、逃避、あきらめの思いといった否定的な受け止め方をしていることが明らかになった。

引用文献

- 1) 川野辺敏編：キーワードで読む生涯学習の課題（再販）、p203、ぎょうせい、1996.
- 2) 関島英子、松本麻美他：中華人民共和国における女性看護職員の退職後の生活設計と影響要因—3省2市20病院の場合—、日本看護管理学会誌、5(2)、p11-18、2002.
- 3) 池田智子、関島英子他：看護職員の退職後の生活設計と関連要因 第2報—中華人民

共和国8地域における病院勤務看護師の調査—、第7回日本看護管理学会年次大会講演集、p72-73、2004.

- 4) 関島英子、池田智子他：看護職員の退職後の生活設計と影響要因—日本の中規模以上の病院勤務看護師の実態—、第7回日本看護管理学会年次大会講演集、p74-75、2004.
- 5) 豊嶋三枝子、小口多美子他：看護職の定年退職後の生活設計に関する研究、第9回日本看護管理学会年次大会抄録集、p218-219、2005.
- 6) 小口多美子、豊嶋三枝子他：看護職の定年退職に対する心理、第25回日本看護科学学会学術集会講演集、p337、2005.
- 7) 前掲⁶⁾
- 8) 豊嶋三枝子、小口多美子他：「看護職の定年退職に対する思い」に関する質問紙の信頼性・妥当性の検討、第26回日本看護科学学会学術集会講演集、p423、2006.
- 9) 日本生涯教育学会編：生涯学習事典（増補版）、東京書籍、p213、1994.
- 10) 前掲⁶⁾
- 11) 前掲⁵⁾
- 12) 南博文他：老いることの意味—中年期・老年期—（初版）、p67、金子書房、1995.
- 13) 岡本祐子、山本多喜司：定年退職期の自我同一性に関する研究、教育心理学研究、33(3)、p185-194、1985.
- 14) 牧野暢男、洲崎好恵：我が国における退職準備教育の現状と評価—調査研究—、日本女子大学紀要、人間社会学部、第2号、p57、1992.
- 15) 関口礼子編：高齢化社会への意識改革—老年学入門—、p148-150、勁草書房、1996.

参考文献

- 1) 松井政明、山野井敦徳他編：高齢者教育論（初版）、東信堂、1997.
- 2) 麻生誠、泉敏郎編：人間の発達と生涯学習（初版）、亜紀書房、1989.
- 3) 川野辺敏：キーワードで読む生涯学習の課題（初版）、ぎょうせい、1994.